本誌に目を通して改めて実感するが、戦後から二十世紀の前三／四期までは、米欧から新知見を導入することに血道を上げた時代であった。明治初期の海外留学時代を彷彿とさせすらする。その活発な海外知見紹介の陰で、海外一流学会誌にと必死にチャレンジした若い医学徒の業績を浮かび上がらせることができないのが残念である。学会賞を授与された業績はどこに示されているのであろう。

百年は、期間が大きすぎる。大きくとも五十年の単位くらいにして、各世代の会員により均等に発言の機会を確保するのはどうだろう。また、少なくとも五年前くらいから十分に時間をかけて、編集委員会で資料を渉猟、検討する必要があろう。「呼吸器学百年史」とされているが、日本呼吸器学会は昭和三十六年に結成された。現在四十余年を過ごした時点にいる。まさに、日本呼吸器学会五十年史を立案してよいタイミングでないだろうか。

コメントばかりになったが、まさにこの種の刊行物編集の難しさを実感した。本誌の編集、刊行に関わられた諸氏のご努力に、深く敬意を表する。今後の学会史刊行のために幾ばくかの助言になることができれば幸いである。

（吉良　枝郎）

〔日本呼吸器学会、千代田区神田二―六―四　柴田ビル二階、電話〇三―三二五四―五二三五、二〇〇三年六月十四日、A四判、四一九頁、定価一〇〇〇〇円〕

編集後記

編集委員に任命されて数年になるが、時々私用で欠席することがある。この十一月の委員会は欠席してしまった。従って近々の問題点について書くことが出来ない。申し訳なく存じている次第です。

本誌の原著投稿がこの一ヵ年間に増加しており、その内容も多彩化しジャッジをお願いするのに一苦労することが多くなった。

この編集委員会の構成を見ると医学出身二名、薬学出身二名、人文出身三名となっており、年齢構成では六十歳以上三名、六十歳以下四名であり、特に医学出身の二名は高齢者である。委員の居住地で見ると東京が三名、神奈川三名、埼玉一名となっている。

新しい分野の論文も増加しているので東京居住の医学出身の若い方に焦点を絞って編集委員適任者を探し出す努力も必要となってきた。

（中西　淳朗）

訂正とお詫び

以下誤植がございました。訂正を致しますとともに、お詫び申しあげます。（編集部）

第四十八巻第四号　英文目次　五九七頁

（正）An Outbreak of Epidemic Louse-Borne Typhus in Tokyo 1914: A Study on the Prevention of Epidemics

（誤）An Outbreak Epidemic Louse-Borne Typhus in Tokyo 1914: A Study of the Prevention of Epidemics

第四十九巻第三号　四六四頁　左より三行目

（正）…金泥下絵を以て…　（誤）…金泥下絵を似て…

同　五七五頁下段　左より五行目

（正）…一部は四書誌…　（誤）…一部は四雑誌…